

【論文】

日本列島古代山城の軍略と王宮・都城

井上 和人

-
- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 1. はじめに | 8. 飛鳥王宮の時代
—外庄と王宮遷移 |
| 2. 古代山城の2つの類型 | |
| 3. 古代山城の分布状況 | 9. 古代山城の時代を超克して |
| 4. 古代山城の築造年代 | |
| 5. 王権防衛と古代山城の軍略 | 10. わが国最初の矩形都城の建設
—天武の都・藤原京 |
| 6. 唐による征服戦争の理由 | |
| 7. 古代山城の否定 | 11. おわりに
—古代国家の構築と都城・山城 |
-

1. はじめに

北部九州と瀬戸内海沿岸そして近畿地方に所在する古代山城と称される山岳城塞遺跡は、日本書紀などの史料に記述される「大野城」「屋嶋城」など9つの「城(キ)」が“朝鮮式山城”と呼称され、史料に出現しないそれ以外の類似した遺跡を“神籠石”ないし“神籠石系山城”“神籠石型山城”などと呼び、あるいは、瀬戸内海沿岸の古代の山岳城塞遺跡を“神籠石類似遺構”と称することもあるなど、かなり錯綜した研究状況にあった。ところが近年それぞれの遺跡についての発掘調査研究が進展し、朝鮮式山城にしる神籠石系山城にしる、基本的には共通した内実を伴っているという判断に基づいて、すべて“古代山城”という呼び方で議論が進められるようになっていく。

ただし、そうではあっても、類型化に関しては、〔Ⅰ〕“朝鮮式山城”と呼ばれてきた、日本書紀に記述のある大野城など、城壁の最低地点が周辺の平地からの比高で30mを超え、周長が2~6kmに及ぶ山城、〔Ⅱ〕史料に築造記事はないものの、Ⅰと同様の城壁の様相をみせる、瀬戸内海沿岸地域の“神籠石系山城”、〔Ⅲ〕史料に記述がなく、Ⅰ・Ⅱ類と異なり、周長が2km前後の山城で、城壁が周囲の平地近くまで下がり、Ⅰ・Ⅱ類の城壁が割石を多用しているのに対して、城壁としては比較的安く作られた列石に精美に加工された切石を使用するという特徴を備えた、北部九州に分布する“神籠石系山城”に分類することが妥当であるとの大方の共通した理解がある⁽¹⁾。

古代山城についての研究史は長く、その発端となった福岡県久留米市の“高良山神籠石”に関する明治31年(1898)の学会報告以後、濃密な研究の蓄積があり、さまざまな議論がくり返されてきた。遺跡の性格ないし機能に関しては、つとに山城跡であるという理解があったも

の、祭祀に関わる霊域説も強く主張されていた。1960年代前後から発掘調査をともなった研究が進められ、城郭としての性格であったことが研究者間の共通認識となったが、築造の時期については“邪馬台国”の時代をはじめ、筑紫磐井の叛乱に関わる5世紀前半、対新羅問題に関わる6世紀末、同様に「新羅征討」策が講じられようとしたことに関わる7世紀前半、そして天智朝における百濟滅亡に対応するとみる7世紀後半とそれに続く時期、さらには11世紀頃の刀伊入寇に備える軍事施設であったとの説なども提起されていた⁽²⁾。

2. 古代山城の2つの類型

古代山城と呼ばれている山岳城塞遺跡は、合わせて22カ所確認されている(図1)。古文獻には、これ以外にも、場所が特定されていないものの、いくつかの、山城と判断される“城”の存在が記載されている⁽³⁾。先にみたように、従来、史料での記録の有無と形態の相異という、まったく異なった次元の規準を混用して類型分別する方途がとられているが、古代山城の名称のもとで体系的に理解するには不適切であろう。

22カ所の古代山城は、いずれも前面に平野部あるいは海岸線が迫っている地形条件下にあるが、比較的高い山の中腹以上に城壁(実態は土塁や石塁)を巡らせるものと、低い丘陵の周縁に城壁があり、一部は周囲の低平地とほとんど同じ標高にまで城壁がおよぶ状況をとっているものとの2類型に明確に分別することができる。

山岳型山城と丘陵型山城

ここでは前者を“山岳型”山城、後者を“丘陵型”山城と呼ぶことにする。城壁の標高が最も低くなる地点と周辺の平地との比高(これを“最低比高”という)をみると、山岳型山城ではおおむね50mから300mに及ぶが、丘陵型山城ではほとんどが10m以下で、0mにまで下る事例も少なくなく、著しい対照を見せている。総じて山岳型山城は城壁の長さ(周長)が3km前後から5kmをこえる大型の山城で、かなり険しい谷や尾根を内部に含んでいるのに対して、丘陵型山城は周長が2km前後から3km以下の規模で、比較的ゆるやかな地形をとりこんでいる。

第3の類型－鞠智城

そうした中で、熊本県の北部に所在する鞠智城(図1-G)だけは、丘陵型山城に近いものの、内部に広い平坦地があり、規模も周長が4km近くあるなど、どちらでもない、第3の類型ともいべき特徴を示している。

3. 古代山城の分布状況

2つの類型の古代山城のうち、山岳型山城は長崎県対馬の金田城(A)、福岡県の雷山城(B)、大野城(C)、阿志岐城(D)、基肆城(E)、高良山城(F)、御所ヶ谷城(M)、山口県の石城山城(O)、

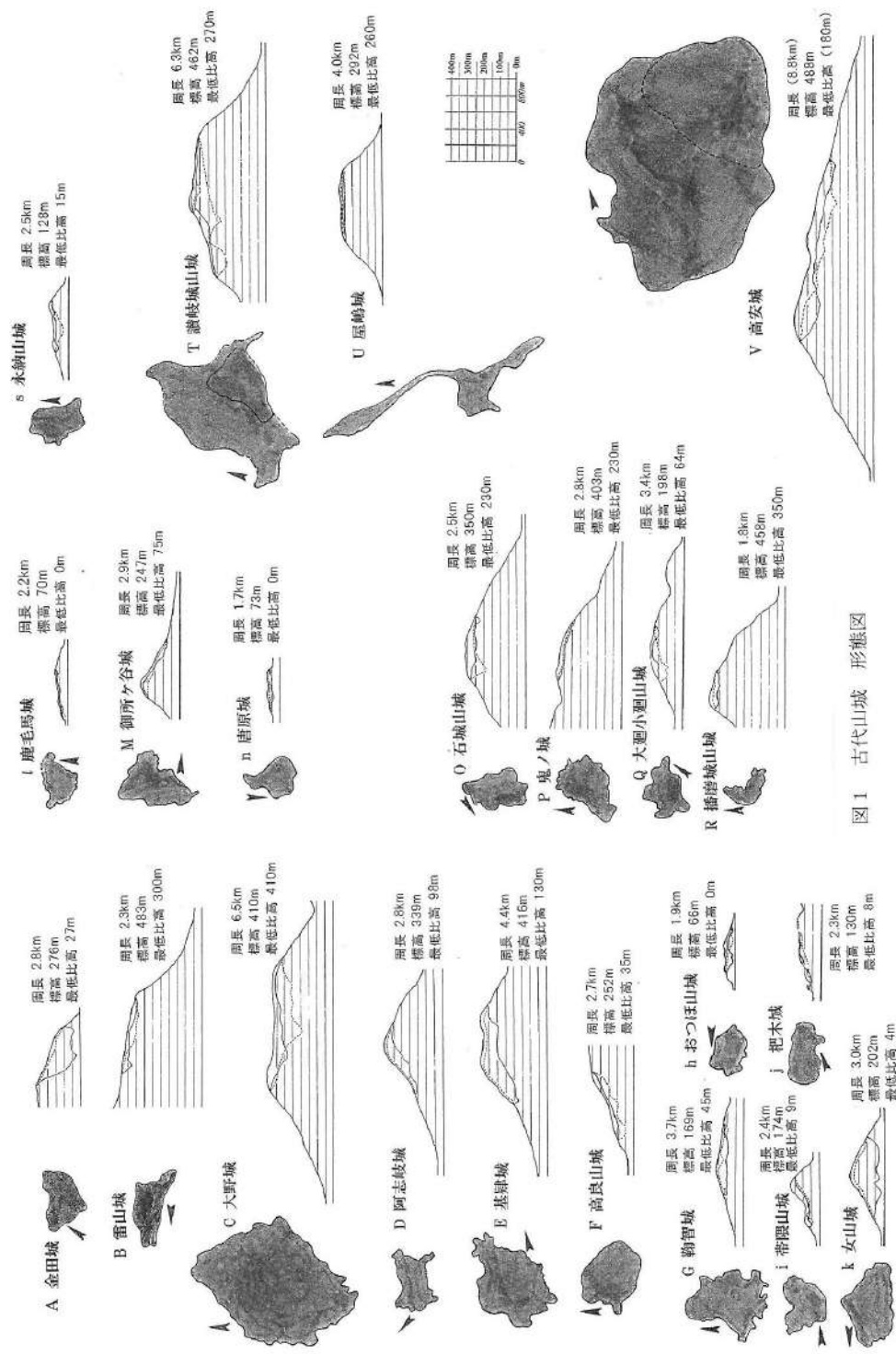
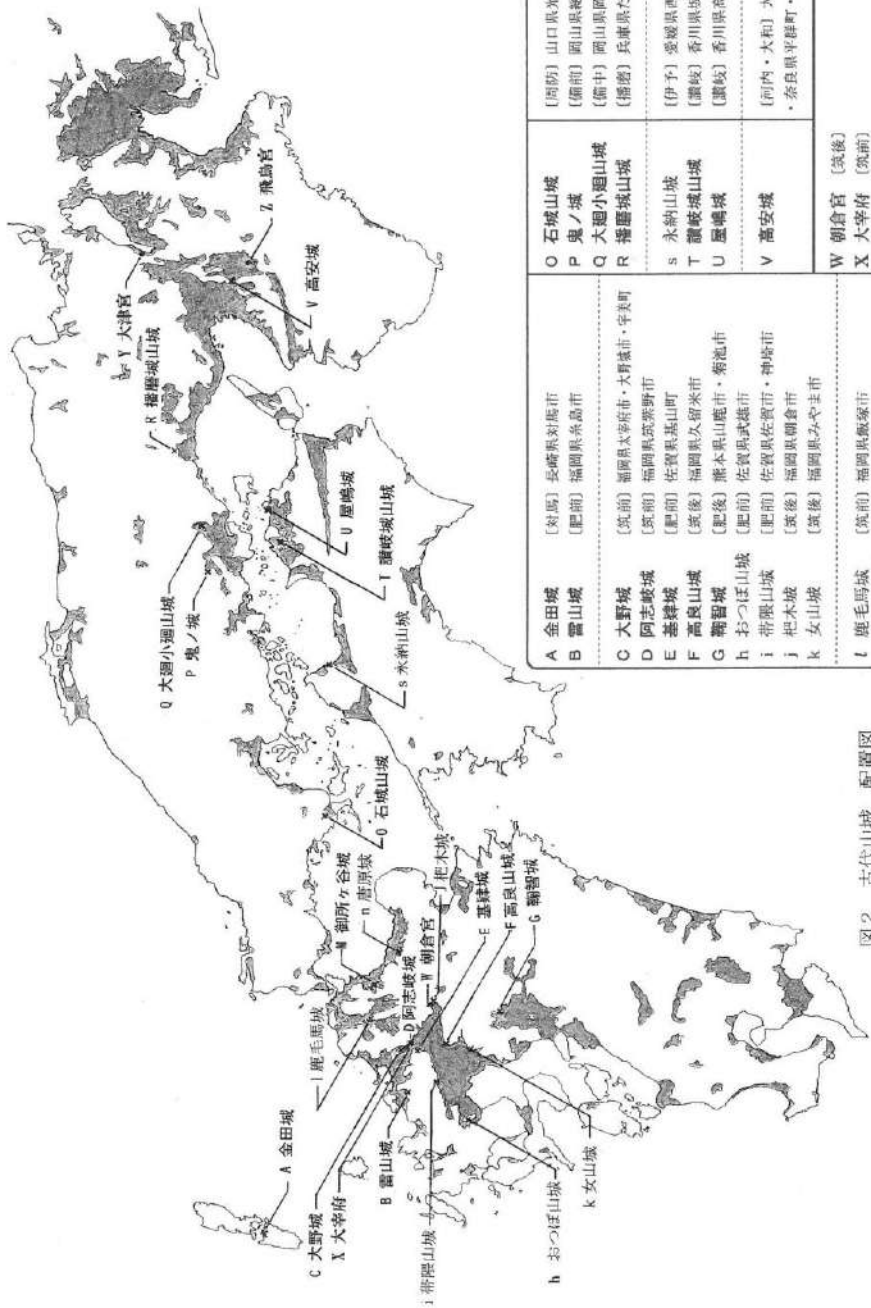


図1 古代山城 形態図



A 金田城	[新座] 早崎町新座市	O 石城山城	[固防] 山口市光市・田布施町
B 雷山城	[肥前] 福岡県糸島市	P 鬼ノ城	[備前] 岡山県総社市
C 大野城	[筑前] 福岡県太宰府市・大野城市・宇美町	Q 大畑小畑山城	[備中] 岡山県岡山市
D 阿志城	[筑前] 福岡県筑紫野市	R 播磨城山城	[播磨] 兵庫県たつの市
E 基津城	[肥前] 佐賀県基山町	s 永納山城	[伊予] 愛媛県高松市・今治市
F 高良山城	[筑後] 福岡県久留米市	T 譚峰城山城	[讃岐] 香川県坂出市・丸亀市
G 鞠智城	[肥後] 熊本県山鹿市・菊池市	U 屋嶋城	[讃岐] 香川県高松市
h おつぼ山城	[肥前] 佐賀県武雄市	V 高安城	[河内・大和] 大阪府八尾市 ・奈良県平群町・三郷町
i 帯隈山城	[肥前] 佐賀県佐賀市・神埼市		
j 杷木城	[筑後] 福岡県朝倉市		
k 女山城	[筑後] 福岡県みやま市		
l 鹿毛馬城	[筑前] 福岡県飯塚市	W 朝倉宮	[筑後]
M 御所ヶ谷城	[豊前] 福岡県行橋市・みやこ町	X 大宰府	[筑前]
n 唐原城	[豊前] 福岡県上毛町	Y 大津宮	[筑江]
		Z 飛鳥宮	[大和]

図2 古代山城 配置図

岡山県の鬼ノ城(P)、大廻小廻山城(Q)、兵庫県の播磨城山城(R)、香川県の讃岐城山城(T)、屋嶋城(U)、大阪府・奈良県境の高安城(V)と、半数以上を占めている。

いっぽう丘陵型山城は福岡県の杷木城(j)、女山城(k)、鹿毛馬城(l)、唐原城(n)、佐賀県のおつぼ山城(h)、帯隈山城(i)、愛媛県の永納山城(s)の7カ所があげられる⁽⁴⁾。このように、古代山城は北部九州に14カ所、瀬戸内海沿岸に7カ所、そして近畿地方に1カ所確認されており、多くが所在する北部九州では、大宰府の周囲、筑後平野周辺、それに福岡県東部の3地域に分布が集中していることを特記しておこう(図2)。

4. 古代山城の築造年代

古代山城の築造年代については、明治期の研究草創時より、前述のように諸説があったが、最近では7世紀代説に収斂しつつある。向井一雄の整理を引用すれば、「7世紀代といってもその築城を大野城(665年)以前とするか以後とするかによって、“先行説(7世紀前半)”と“後出説(7世紀後半～8世紀初頭)”に分けられる」とされる。また「斉明天皇西下時築城説」の提起以降、先行説の年代は660年頃まで引き下げられ、663年の朝鮮半島での白村江の敗戦後の神籠石系諸城の未完成・放棄、一部修築後の朝鮮式山城との併存を認めようとする傾向にある」との研究状況下であり、「先行説は全ての城を対外防衛用とし、異なる類型の存在を地域性とみているが、後出説では時期差や機能差(対外防衛→律令制化・地域支配)として段階的な築造過程を推定しており、編年序列は軍事性の低下していく方向で想定されている」とした上で、向井自身は、前項で紹介したⅠ類の山城群を天智朝期の対外国侵略軍用、Ⅱ・Ⅲ類の山城群を天武・持統朝期における、国内地域勢力に対する国家権力示威目的の施設であったとの所見を提起している⁽⁵⁾。

築造時期についての議論で、見解の相違の一つの重要な対象となっているのは、向井の分類でいうⅢ類である。“先行説”では、Ⅲ類の山城、すなわち比較的低い丘陵を利用し、城壁である土塁の基礎部に切石を列石として使用している一群の山城が、筑後平野周辺を中心として分布していることから、多くの研究者は、661年の斉明天皇西征時に造営した朝倉橋広庭宮(朝倉宮)を防衛するためであったとみて、白村江の敗戦(663年)以前に山城の築城が行われたと判断している⁽⁶⁾。

いっぽう、Ⅲ類の古代山城はⅠ類のいわゆる“朝鮮式山城”に比べると城壁構造が簡略化されているとみて、たとえば赤司善彦は、これが後出の要素であるので「朝鮮式山城と構造や構築技術が接近しているし、その分布も重なり、少なくとも両者は同時併存していた時期があった。大宰府中心の防衛圏という基本戦略は一貫しているが、仮想敵国とされる新羅との緊張関係が推移するなかで有明海側をも想定した防衛網の拡大にともない、大宰府を中心に枝を広げ

表1 古代山城関係 年表

年 代	事 項
589 崇峻 2	隋が中華大陸・南北朝を統一。
618 推古 26	隋が滅び、唐が興る。
628 推古 36	唐が中華大陸・天下平定。
630 舒明 2	飛鳥岡本宮へ遷都(飛鳥ではじめての王宮)。 第1次遣唐使の派遣。
645 皇極 4 孝徳 1	大化の改新(乙巳の変:飛鳥板蓋宮)。 難波宮へ遷都。
656 斉明 1	後飛鳥岡本宮へ遷都。
660 斉明 6	唐・新羅連合軍が百済を滅ぼす。 大和朝廷は百済遺臣の救援を決定。
661 斉明 7	5月、齐明天皇、朝倉橘広庭宮に入る。 7月、天皇、朝倉宮にて崩御。
663 天智 2	百済西岸の白村江での海戦で唐に敗北。
664 天智 3	対馬島、杵岐島、筑紫国等に防と烽を置く。また筑紫に水城を築く。
665 天智 4	長門国に築城。筑紫国に大野、榛(基肄)の二城を築く。
667 天智 6	3月、近江・大津宮に遷都。 11月、倭国に高安城、讃吉国山田郡に屋嶋城、対馬国に金田城を築く。
668 天智 7	中大兄皇子、天皇に即位(これまでは称制)。 唐・新羅連合軍が高句麗を滅ぼす。
(668 or 669)	唐が倭国を征伐するとしながら、内実は新羅を討伐しようとしているとの情報が伝わる。
669 天智 8	中臣(藤原)鎌足、没す。 新羅・唐の間で戦争(羅唐戦争)はじまる(~676)。
670 天智 9	高安城修理。また長門城一、筑紫城二を築く。
671 天智 10	百済亡命人の達卒谷晋首らに兵法での貢献に対し叙位する。 新羅軍、旧百済領で唐軍と戦う。 11月、唐使・郭務儆ら二千人、筑紫に至る。 12月、天智天皇、崩御。
672 天智 11	5月、唐使・郭務儆ら帰国。 6~8月、壬申の乱。 新羅軍、高句麗遺軍とともに唐軍と戦い、勝ち、負けを繰り返す。
673 天武 2	大海人皇子、後飛鳥岡本宮にて天皇に即位。
676 天武 5	唐、安東都護府を遼東に遷し、朝鮮半島の統治を新羅に認める。
694 持統 8	藤原京遷都。
698 文武 2	大宰府に命じて、大野、基肄、鞠智三城を繕治させる。
699 文武 3	大宰府に命じて、三野、稻積二城を修させる。
710 和銅 3	平城京遷都。
719 養老 3	備後国安那郡茨城、葦田郡常城を停止する。

るようにして神籠石式山城（Ⅲ類山城のこと…井上注）の多くが築造されることになった」と論じて、Ⅰ類山城が先行し、その築造年代は史書にみる 665 年の大野城等を嚆矢とすると判断しているのである⁽⁷⁾。

ここで問題とすべきはⅠ類とⅢ類山城の先後関係である。日本と朝鮮半島の山城の構造上の比較研究を試みた亀田修一によると、Ⅲ類山城の土塁の版築工法は朝鮮半島の百済地域で確認されているものと基本的は同じであるという⁽⁸⁾。Ⅰ類山城に特徴的とされる、城壁の諸要所に施されている石築の壁体も、朝鮮半島でしばしば見かける石築の城壁と酷似した外観を形成している。要するに、日本の古代山城の範型となったのが朝鮮半島、おそらくなかでも百済地域のそれであったと推定されるが、Ⅰ類といい、Ⅲ類といい、そしてⅡ類の山城もまた、構築技術は、いずれも朝鮮半島にほぼ直接の出自があるとみななければならない。つまり、日本列島内で構築技術が時間の経過とともに変化したのではなく、複数の類型に分類することが可能な技術系統が同時存在したのであり、先後関係はないとみるのが妥当な理解である。

すでにみたように、Ⅰ・Ⅱ類すなわち山岳型山城とⅢ類・丘陵型山城との間には、形態の上で顕著な相違がある。古代山城の築造時期が限られた年代に集中しているとすれば、20 数カ所の古代山城は、連関した軍略構想に基づく一連の軍事施設群であり、類型間の相違は、築造時期差を反映するのではなく、機能の違いを示すものと考えerる必要がある。

斉明朝築造説の非

如上のように、古代山城が築造された期間については、ほぼ7世紀後半期であると判断されているものの、築造の開始年代に関しては、661年に九州・朝倉宮で没した斉明天皇の治世期とする見方と、663年の朝鮮半島西海岸での百濟の敗戦後、日本書紀、天智4年（665）8月条の「達卒答怱春初を遣わして城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留、達率四比福夫を筑紫国に遣わし、大野および椽（=基肄）の二城を築かしむ。」の記事を最初の古代山城築造とみる見解とがある。斉明朝説では、筑後平野の周縁の杷木城、帯限山城、おつぼ山城、高良山城、女山城が朝倉宮を防護しているように分布しているとみる点を重視する。しかし、この想定にはやや無理がある。

660年7月に、それまで長い間わが国と同盟関係にあった百済が、唐と新羅の軍事攻撃により滅亡する。斉明政権は西征を決断し、援軍を率いた斉明天皇が筑後の朝倉宮に入るのが翌661年の5月。その2ヵ月余り後の7月24日に天皇は朝倉宮で崩御する。その後、大権を引き継いだ中大兄皇子は斉明の亡骸とともに11月には飛鳥に帰還し、斉明帝の葬送の儀礼を遂行している。斉明の没後ほどない661年9月の時点で、中大兄皇子は長津宮（福岡市の某所）において、百済皇子・豊璋に織冠を授け、軍兵5千人をつけて百済本国に送還させる指揮をとっており、それ以後も朝倉宮が政事軍事の中枢であった形跡はない。従って、朝倉宮が天皇の居所として機能したのは2ヵ月半に限られるのであり、周辺に分布する山城群が朝倉宮防護を目的

として築造されたとする理解は現実的ではない⁽⁹⁾。

天武朝築造説の非

いっぽう、古代山城の築造がいつまで続けられたかという点について、最近の研究動向をみると、日本書紀に築造の具体的な記事がある 665 年から 670 年まで、つまり天智朝に限られるのではなく、天武朝（672 年以降）から文武朝（700 年前後）のころまで新規の築造が行われるとする見解が多くみられる。しかし、奈良時代を通じて、さらに平安時代の前半頃まで修理が行われ、山城として存続したことが文献記録や発掘調査で明らかな大野城、基肆城、鞠智城をのぞくと、築造工事が天武政権期以後まで継続したことを実証する形跡はない。

たとえば、岡山県総社市の鬼ノ城では、城郭内部の発掘調査で、7 世紀末ころの土器類が比較的まとまって出土していることをもって、鬼ノ城の山城としての築造工事がその頃にも続けられていたとする見解がある⁽¹⁰⁾。しかし、城壁の土塁の築土の中から出土したのであればともかく、そうではない出土例をもって、築造の時期を判断することは考古学的に成り立ちえない。鬼ノ城に関しては、城壁に開く門跡に関する発掘調査の成果をもとに、比較的長期間にわたる築造期間を想定する稲田孝司の所論がある⁽¹¹⁾。しかし以下に論じるように、妥当な理解ではない。

稲田孝司説批判

稲田は古代山城の築造が天智朝期だけではなく天武朝期以降にまで継続することを、発掘遺構の分析を通じて論じようとした。すなわち、岡山県総社市の鬼ノ城での発掘調査で明らかにされた「城壘築造過程が、同時に、造営される諸施設の形式学的な崩れの過程でもあったことを、4 城門（東門・西門・南門・北門）の規模や部材の小型化、門礎加工の崩れ、城壘に対する城門優位の後退など 10 項目に」において立証されたとする。その項目とは①門の間口・奥行き、②門の全体規模、③門の角柱と円柱、④門礎の加工、⑤門の階段、⑥門の外城面、⑦門の内側付属柱、⑧門城内側の敷石と門道延長石垣、⑨門柱と城壘盛土との関係、⑩門と内側柱列である。まず④以下の項目に関してみると、4 門の建設順序すなわち西門→南門→北門→東門という稲田の判断を前提にして、各項目の実態を説明しようとしているに過ぎず、不可解である⁽¹²⁾。では、建設順序を反映すると稲田が判断する主要な論拠としての①～③についてはどうか。

稲田が作成した表に明らかなように（表 2）、4 門の中で西門の規模が最大であり、南門、北門と続き、東門が最小である。門建物としての構造は西門、南門が間口 3 間、奥行き 2 間であり八脚門、北門、東門が間口 1 間、奥行き 2 間の四脚門。使用柱は西門、南門がすべて角柱、北門は親柱のみ角柱で他は円柱、東門はすべて円柱。こうした事実から、稲田は規模縮小傾向が明白であり、門の平面形式は八脚門から四脚門へと整理できるとする。そして、遺構から確認される角柱は 2 尺角で、円柱は直径 40～45cm であり、「一辺 60cm の角材を得るためには直径 85cm 以上の巨木が必要」とされるので、建設の進行にともない、「材料確保の困難さに

表2 稲田論文の表「鬼ノ城4城門の変化」

	西門	南門	北門	東門
①間口・奥行	3間×2間	= 3間×2間	★ 1間×2間	= 1間×2間
②全体規模	12.3m×8.25m	= 12.3m×8.25m	↘ 4.1m×6.3m	↘ 3.30m×5.8m
③角柱・円柱	すべて角柱	= すべて角柱	↘ 親柱のみ角柱	↘ すべて円柱
④門礎加工	方立幅22cm	= 方立幅22cm	= 方立幅22cm	↘ 方立幅11cm
	直線弧線の斜面	= 直線弧線が逆位置	↘ 斜面の痕跡	↘ なし
⑤階段	門内へ1.5m入る	↘ 門内へ1.0m入る	↘ 門外の敷石に変化	↘ 棒状石に変化
⑥門城外面	平門	★ 懸門、高低差1.4m	= 懸門、高低差1.7m	= 懸門、高低差2.5m
⑦城内側付属柱	なし	★ 角柱2本	↘ 円柱2本	★ なし
⑧門道延長石垣	開く角度:5度	↘ 開く角度:15度	↘ 開く角度:15~30度	↘ 開く角度:30~40度
	通常の敷石	↘ 直角三角形の角状	?	↘ 尖る角状
⑨柱掘形レベル	門礎直下で柱掘形	★ 門礎直下で柱掘形	= 門礎直下で柱掘形	= 門礎直下で柱掘形
⑩門と柵の接続	門親柱に柵	= 門親柱に柵	★ 城内寄り控柱に柵	= 城内寄り控柱に柵

＝類似 ↘漸移的な変化 ★大きな変化

よって角柱の使用を放棄せざるをえなくなったと解すべき」という根拠で、西門・南門→北門→東門という順序であったと稲田は判断するのである。しかし、たとえば、古代遺跡で確認される円柱の場合、伐採した丸太材をそのまま使用する芯持材だけでなく、より直径の大きな丸太材から、樹芯をことさらに避ける芯去り材を使用することもあり、その場合、原材はかなり太いものが必要となる。あるいは、円柱が用いられている北門、東門で、かりに角柱を使用するとして、合わせて10本に満たない材料の確保が不可能であったとは想定しがたい。

鬼ノ城の発掘報告書のように、4門のうち西門は「最も標高が高く、西門からは広範囲に視界が開け、正面には遠く水島灘から笠岡諸島に至る瀬戸内海が一望でき」「鬼城山（鬼ノ城の所在する山…井上注）山頂から南西方向に地形が大きく張り出した傾斜変換点に築かれているため視界が大きく広がり、城外側からも視角的に強いインパクトを与えている」（19）。また南門も西門に次いで城外から目立つ位置にある。いっぽう北門は背後の山地を前にし、東門は城域の中では最も低位置にある。4門はこうした立地条件や城塞としての軍略的配慮に基づいてそれぞれ格付けられていたとみることができる。各門の規模と構造は正しく対応している。山城における城門は戦術上きわめて重要な機能を付託される構築物であり、城堡の構造と連動させて、当初から一貫した全体計画のもとに設計されていたはずである。稲田は山城の造営が進行するにつれて築造技術が簡略化し、“形式的な崩れ”が発生したとの判断を下そうとしているが、型式学上の“変化”“退化”と見なしている諸要素の諸現象は、時期差を示すのではなく、形態差によるものとみるのが妥当である。

さて、稲田は22ヵ所の古代山城の造営年代について、出土遺物の状況も踏まえて「おしなべて664年以降に築造された可能性が高い」とし、城門の柱や扉を受ける各山城出土の石造唐居敷と藤原宮西門出土の唐居敷との比較検討を通じて、山城は「遅くとも藤原京遷都（694）以前にすでに築造が終了していた」と述べる。さらに稲田は表3のように、「古代山城築造の第1段階」として、日本書紀に築造年代の明らかな大野城（665）、基肆城（665）、金田城（667）、

表3 稲田論文の表「古代山城の城塁系統と築城開始時期編年」(※凡例は省略)

	第1段階	第2段階	第3段階
第1系統	・金田城 (667)		
第2系統	○大野城 I 期 (665)	◎ II 期 (8世紀初)	
	○水城 (664)		
	○基肆城 (665) ?		
	○鞠智城 (698以前) ?		
第3系統	・屋嶋城 (667) ?		
	□鬼ノ城		
	□讃岐城山城		
	□播磨城山城 ?		
	・大廻小廻山城		
	・永納山城		
第4系統	・阿志岐城		
	・雷山城		
	・御所ヶ谷城		
	・高良山城		
	□石城山城		
	・女山城		
	・杷木城		
	・おつぼ山城		
	・帯隈山城		
	・鹿毛馬城		
	・唐原城		
畿内	○川原宮 (655) ?		
	・高安城 (667) ?		
		◎藤原宮 (694)	

屋嶋城 (667)、高安城 (667) の諸山城をあて、「第2段階」に築造された山城として鞠智城、鬼ノ城、讃岐城山城などを、「第3段階」に大廻小廻山城、永納山城、女山城などを位置付ける。この第1段階、第2段階、第3段階の時期区分の根拠について、不敏にして私は稲田の説明がよく理解できない。城塁列石の様相の違いや唐居敷の加工痕跡の有無などを、なべて時期の違いに帰するとの判断かとも解されるが、地域的な相違、施工

を指導した技術者(集団)のありようなどによる相異という視点が考慮されるべきである。

稲田は、さらに、「築城第1段階が天智朝のできごとであったとすれば、築城第2段階の画期を天武天皇による政権交代の672年か、その直後と推定するのが自然な流れであろう」とする。なにゆえに「自然」であると判断できるのであるか、不可解である。「第2段階」の設定自体、その内実が十分に検証されていないだけでなく、「第1段階」の山城構築の原因が唐の軍事的脅威に対応するものであったとみるのである限り、この「画期」の背景として外的要因を想起するべきであるが、稲田にその視点はない。総じて、稲田の所論は成り立ちがたく、古代山城の築造事業が天智朝までではなく、天武朝以後にも継続することの実証的根拠はないとみなさなければならない。

古代山城の築造年代

くり返しになるが、築造年代について、丘陵型山城の築造は斉明朝期であり、山岳型山城に先行するという見方がある一方で、丘陵型山城(かつては、その多くは神籠石式山城とも呼称されていたが)は列石の状況など城壁の構造が簡略化されているとして、山岳型山城と構築技術が近接しているものの、後出の様相であるので、山岳型山城が先行するという見方がある⁽¹⁴⁾。

両者で先後関係についての評価が逆になっているのだが、現段階で確かであるのは、先にも述べたように、これら2つの類型の古代山城には先後関係があるのではなく、同じ時期に、同時並行して築造されたと考えるのが妥当である。そしてその年代は日本書紀に山城築造記事の

ある 665 年から 670 年までの 6 年間、すなわち大和飛鳥に政権中枢を置いていた中大兄皇子政権時代から、667 年の大津宮遷都後の天智政権下の時期に限定されるとみるべきだと考える。

5. 王権防衛と古代山城の軍略

西日本各地で築造された 20 ヶ所以上の古代山城は、ではなんのための施設であったのだろうか。山岳や丘陵に立地し、城壁で圍繞される閉鎖的空間があることなどから、軍事的機能を目的として築造されたことに異論はあるまい。また日本書紀に記載される 665 年から 670 年までの築城記事は、663 年の白村江の敗戦直後の国防体制構築の一環として理解できることも間違いないことであろう。

ただし、その機能に関しては、“緊急時の逃げ込み用の城”⁽¹⁵⁾という見方や、軍事的な実用性はなく、“白村江直後の緊迫した情勢下で交通の拠点に築かれたランドマーク的存在であった”⁽¹⁶⁾、あるいは“天皇・中央政府の意志のもとに構築された、すぐれて政治的な記念物であった”⁽¹⁷⁾などとの所論もあるが、以下に考察するように、妥当な理解ではない。

大宰府防衛説の非

北部九州の古代山城については、かねてより大宰府を防衛するためのものであるとの理解が広くおこなわれている。大野城、阿志岐城、基肆城は、まさに大宰府を囲むかたちに配置されている。また大野城の築城に先立つ 664 年には、大宰府の西北に近接する位置に、内外の濠を備えた大規模な防塁である水城が築造されている。さらに、大宰府都城を想定し、その領域を完全に圍繞する羅城構造の防衛方式を想定する研究もある⁽¹⁸⁾。

しかし、こうした理解は当を得たものではない。第 1 に、大宰府の施設が今の場所に整備される年代は、いまだ確定されていないのである。発掘調査の所見によると、重複している遺構群の最初の第 I 期は、8 世紀初頭の造営になる第 II 期の下層にあることは確かであるものの、新・古 2 段階に分期される古段階は「7 世紀第 3 四半期から第 4 四半期まで」としか捉えられていない⁽¹⁹⁾。つまり、水城が築造された 664 年、そして大野城や基肆城が築造された 665 年時点にあって、大宰府が政治的軍事的に重要な施設として、つまり防護されるべき施設として整備されていた確証はないのである。なによりも、大宰府防衛目的であれば、水城は最終防衛線であることになる。そのすぐ傍に重要拠点を設定することが、軍事常識に適うとは考えがたい。

かりに大野城などが大宰府防衛を目的としたものであったとすると、筑後平野周辺の山城群はなんのために築造されたのか、鞠智城は、また別の目的で築造されたのかという議論になる。そうとすると、九州北東部、瀬戸内海沿岸部など、各地域の古代山城は、それぞれ別の動因で築造されたと前提されることになるが、はたしてそれが妥当な歴史理解であろうか。

別に論じる必要があるが、大宰府が現在の位置に整備されるのは天武期以降のことであると考える。そうであれば、北部九州の古代山城群は大宰府防衛のための軍事施設ではなかったことになる。

唐の軍事的侵略という危機

663年の白村江の敗戦直後、中大兄皇子政権が、そして日本列島全体が危惧したのは、百済の征服を遂行した唐が、華夷秩序をより拡充するための軍事的行動として、日本列島を攻略する危険性がきわめて現実化したことであった。

唐が日本列島に侵攻する場合、その最終目標は、当然のことながら、当時の日本王権の所在地である大和飛鳥の都であり、天皇（大王）の捕捉ないし殺害をもって、日本の国家体制を壊滅させ、日本列島を唐に服属させることにある。当時、唐の侵略に対する国防の最高責任者は中大兄皇子であった。

中大兄皇子は661年の母・斉明天皇の没後、当然の後継者であったが、667年の近江・大津宮遷都の翌年正月に、ようやく天皇位に即位する。この7年間の天皇不在という異常事態については、さまざまな解釈がなされているが、国家の危機に直面している状況の中で、多くの手順を踏まなければならない即位の儀式に費やす余裕はなかった。その間、もっぱら外交や国防施策の推進に専念しなければならなかったからとみるべきであり、それほど唐による侵略に対する危機感が強かったことを想起しなければならない。

古代山城防衛網の構築

古代山城の築造事業は、唐の侵攻に対応するための最も重要な防衛策の発動であった。660年の百済攻撃に際して、唐は13万の軍勢を海路、百済に送り込み、新羅軍4万と連合して攻略戦を展開した結果、最終攻撃目標である王都・泗泚城（扶余）は陥落し、この時点で国家としての百済は消滅した。百済側は甚大な戦禍を被り、国王、皇太子以下1万2千人余りが拘束され、唐都洛陽に連行された。また貴族、官人、軍人をはじめとする多くの百済人が唐の追及を逃れるべく日本列島に渡来してきた。その人々は大和政権の庇護下にはいり、日本書紀では帰化人と呼称される。

中大兄皇子政権が唐軍による侵略に対抗する防衛策を講じる際に、長年にわたる新羅、高句麗との戦役に携わり、さらに唐の侵略軍隊と対峙してきた百済の亡命帰化人たる軍人や軍事技術者の協力を求めたことは、既出のように、日本書紀に明記されているところである。

山城群の軍略（1）－高安城の軍略

古代山城の軍事的機能を考える場合、重要な点は、唐侵略軍の最終目的が大和飛鳥の王都にあること（667年以降は近江大津宮）であり、その視点に立脚して、20ヵ所を超える古代山城が、統一した防衛軍略の中で、どのような機能・役割を付与されていたのかということを究明しなければならない。

こんにち確認されている 22 ヶ所の古代山城のうち、最大の規模を示すのは高安城である。高安城は周長が約 8.8km と推定されており、次に規模の大きい大野城や讃岐城山城の約 6.5km にくらべても格段に大きい（図 1）。高安城は大阪府と奈良県境の南北に延びる生駒山地の南端に位置しており、すぐ南に大和川の峡谷を見下ろす地点にある。

唐の大規模軍隊が瀬戸内海を東航し、大阪湾（当時は難波乃海）岸に上陸して大和飛鳥を攻撃するには、大和川の峡谷に沿って遡上するのが唯一の経路である。つまり、高安城は唐軍が奈良盆地に侵入する局面で、狭隘な大和川峡谷で唐軍の行軍を阻害し、殲滅するためにもっとも効果的な場所に設定された山城であった（図 3）。

高安城内の 488m の最高標高地点からは大阪平野（河内平野）をこえて大阪湾をみはるかすこともできる。かりにこの大和川峡谷での攻撃が不首尾に終わった場合は、最終決戦地は奈良盆地、飛鳥の周辺ということになる。高安城は、飛鳥王都防衛にとって最後の攻撃拠点なのであり、そこを最大規模に設定したことは当然のこととして理解できよう。

山城群の軍略（2）－筑紫野谷の軍略

高安城の立地条件と共通する古代山城がある。大野城、阿志岐城、基肆城の 3 城である。前述したように、この 3 城の役割は従来、大宰府を防護するためと位置づけられてきた。しかし大宰府の存在を度外視すれば、3 つの山城が、福岡平野と筑後平野を結ぶ幅が狭まった谷地形（かりにこれを筑紫野谷と呼ぼう）を扼す位置にあることを、明瞭にみてとることができる。この筑紫野谷を南に抜けると、筑後平野がひろがり、その正面に当たる地点に高良山城が配置されている（図 4）。

山城群の軍略（3）－北部九州での要撃軍略

もちろん、唐侵略軍としては、九州に上陸することなく瀬戸内海に進軍して大和攻撃を試みるのがもっとも効率的な軍略である。しかし、その方途をとられた場合、唐の大軍が兵力を損耗することなく直接王都を攻撃することになり、日本側として防衛上、きわめて危険な状況となる。あるいは、唐軍の軍略としては、いったん九州北部に上陸し、態勢を整えるという方途を選択する可能性があるとの判断もありうる。

日本側として期すべきは、まず九州で唐軍に最大限の打撃を与えることでしかありえない。かりに唐軍が北部九州に上陸せずに東行しようとしても、九州に駐屯している軍隊が唐軍の背後を追撃する態勢をみせれば、唐軍は九州に上陸し、迎撃戦力の殲滅作戦を実行せざるをえないであろう。

日本側として組み立てた、山城群を主軸とする軍略は、およそ次のようであったと考える。

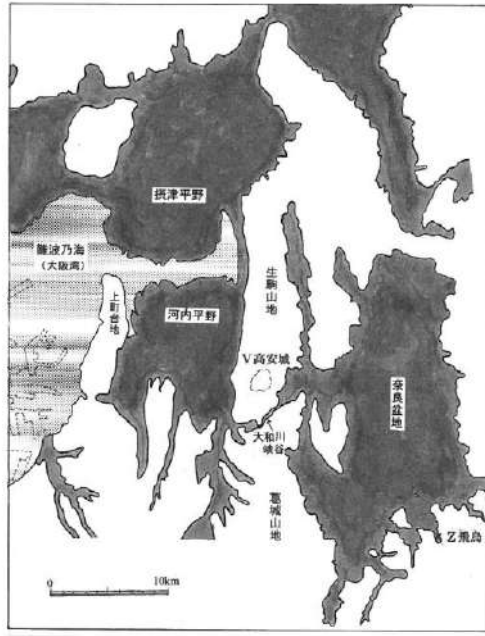


図3 高安城の位置

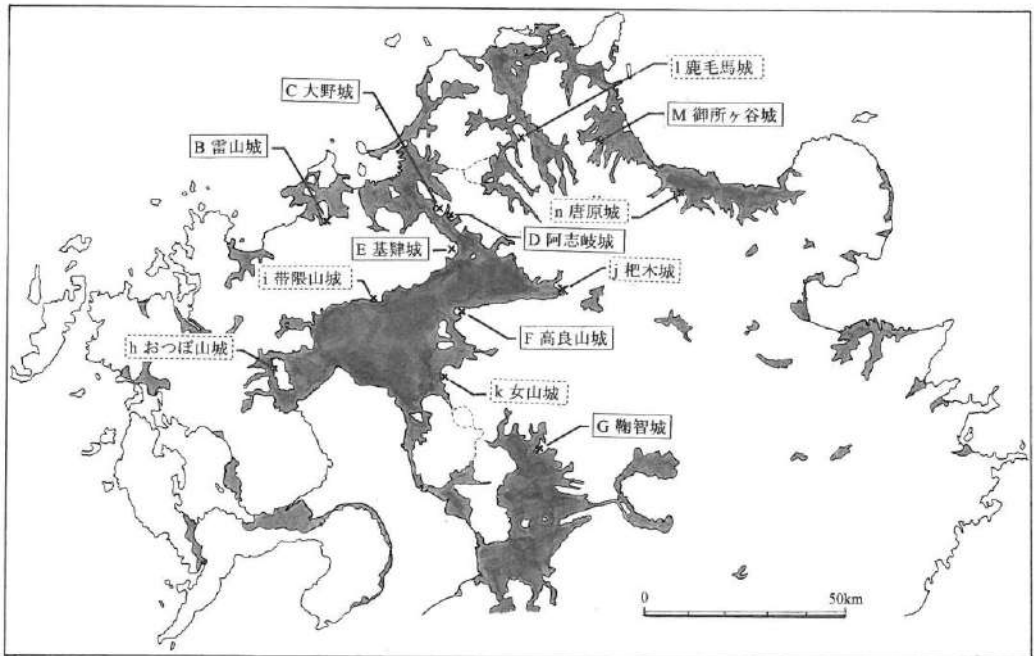


図4 北部九州城 古代山城配置図

- (1) 対馬・金田城は、唐ないし唐・新羅連合侵略軍が最初に寄港する地点として、敵軍の日本列島への侵入を察知し、情報を本土へ伝達するための軍事情報拠点。
- (2) 雷山城は海岸線からやや離れているものの、北方つまり玄海灘への眺望にすぐれた地形条件にあり、敵船団の監視城塞としての役割を担う。また文献にあらわれる三野城（筑前国那珂郡海部カ）・稻積城（筑前国嶋郡嶋郷カ）は、所在地が確定されてはいないものの、いずれも玄海灘海岸線に近接した位置にあると思われ、敵軍の九州北岸揚陸に際して、雷山城駐屯軍とも連携して、汀^{みづべ}作戦で敵軍に打撃を与える作戦のための基地として位置づける。
- (3) 上陸適地である福岡平野の南辺に水城を敢えて設定し、その背後に大規模迎撃戦力が控えていることを侵略軍に察知させる。
- (4) 迎撃軍の主力は筑後平野に置く。
- (5) 侵略軍が筑後平野に進撃しようとするとき、まず水城で迎撃し、さらに筑紫野谷で大野、阿志岐、基肄の3山城を拠点とする攻撃を加える。
- (6) それでもなお、侵略軍に十分な打撃を与えない場合、筑後平野に誘^びき出し、そこを決戦の場とする。

筑後平野での決戦の要撃（迎え撃つ攻撃）の中枢は高良山城に置かれたと考える。日本側の部隊は山城だけでなく、平野部の各所にも配置されていたと考えるのが妥当だろう。

- (7) 筑後平野西縁から北縁にかけてほぼ等間隔に配置された、おつぼ山城、帯隈山城、杷木城の3つの丘陵型山城の位置をみると、おつぼ山城は平野の西端、杷木城は東端、帯隈山城は基肄城とおつぼ山城のほぼ中間地点にあり、計画的な配置であったことを示唆している。役割については、最重要な決戦に際して、

- (a) 兵站物資の備蓄・補給基地の機能をもたせる。
- (b) 朝鮮半島百濟地域で多く見られるように、小規模ではあるが軍隊の集結場所。
- (c) みせかけの軍隊集結場所として機能させる。

という軍略であったことなどが考えられる。

唐軍は海路進撃してくるのであるから、兵器や食料などの補給つまり兵站が大きな弱点となる。それだけに、日本側としては地の利を最も有効に発揮させるためにも、十分な兵站戦略を構築しておくことが勝利のためには必須であったことは間違いない。丘陵型山城は、実際の攻撃や防御の拠点としては信頼感に欠ける地形と構造を示している。山岳型山城と比べると、目立たない場所に立地していることも考え合わせれば、兵站基地としての役割を想定することに、より蓋然性があるろう。

このように考えると、筑後平野周縁山城群の南方の、山地、丘陵地帯を間において隔てた地点に設定された第3の類型である鞠智城の役割は、おのずから鮮明になってくる。すなわち、

(8) 筑紫野谷での攻略戦、さらに筑後平野での決戦で日本側が敗北した場合、敗残兵達が退避する場所であり、そこで兵力を再結集して、おそらくすでに東行を再開した唐軍を背後から追撃する体制を構築するための拠点として設定。

つまり鞠智城は九州迎撃作戦の最後の砦として設定されたのである。城壁で囲まれた郭内に、ほかの山城にはない広い平坦地が確保されていることは、こうした機能を裏付けるものである。また、ここが侵略軍による攻撃で陥落するという状況に陥った場合、残兵は背後に控える九州南部の広大な山野に難を逃れ、再興を期すことが可能な立地条件下にある。

(9) 女山城は、高良山城および筑後平野の戦場と鞠智城をつなぐ中間での兵站基地の機能をもつ。

山城群の軍略（４）－瀬戸内海に侵入する唐軍への攻撃軍略

(10) 九州東北部の鹿毛馬城・御所ヶ谷城・唐原城は福岡平野、筑紫野谷、筑後平野での敵軍殲滅作戦が不成功であった場合、敵の軍隊が瀬戸内海に侵入する経路にあり、九州内でできるだけ敵軍に損耗を生じさせる戦略に供する山城。

(a) 御所ヶ谷城（豊前）は攻撃部隊の集結拠点。

(b) 鹿毛馬城（筑前）と唐原城（豊前）は御所ヶ谷山城軍の後背地での兵站補給拠点。

(11) (10)の作戦で敵軍に十分な打撃を与えられなかった場合、瀬戸内海を敵軍が東侵する際に南北両岸から攻撃するための軍隊集結地点。水軍や平野部に配置された戦力と密接に連動した迎撃戦を想定していたと考える必要がある。

(a) 瀬戸内海北岸－「長門」の城・石城山城（周防）・茨城（備後国安那郡抜原郷）・常城（備後国葦田郡都弥郷）・鬼ノ城（備前）・大廻小廻山城（備中）・播磨城山城（播磨）

(b) 瀬戸内海南岸－永納山城（伊予：兵站補給拠点）・讃岐城山城（讃岐）・屋嶋城（讃岐）

山城群の軍略（５）－大和最終防衛体制

(12) 高安城は、瀬戸内海での迎撃が不成功であった場合、王都飛鳥に敵侵略軍が侵入することを防御する戦略の最終軍事拠点（既述）。

(13) 飛鳥王都周辺での防衛軍隊の配備。

山城築造事業は、当然のことながら、大規模で困難な土木工事を伴ったのであり、甚大な労力と費用を必要とした。663年の白村江の敗戦の直後から、中大兄皇子政権は、従前から蓄積している兵法（軍事学）の知見をもとにしつつ、百濟から帰化した軍事技術者達の密接な関与を受けて、上記（１）から（13）に及ぶ防衛軍略を構想し、実施施工を推進したと考えられる。

防人の真実

九州の防衛軍として玄界灘の沿岸や対馬などに防人（さきもり・ボウジン）と呼ばれる軍隊の配備が開始されるのも、水城の築造と同じく、白村江の敗戦の翌年、664年のことである。防人は、前守、岬守などと表記されることもあり、本来は唐の軍事組織の名称で、国の辺境を守

る兵団の謂いである。

当初の防人が北部九州のどこに配属され、具体的にどのような軍事活動をおこなったのか、史書に記録するところはないが、しばしば想定されているような、島嶼や沿岸部に限られたことではないと思う。北部九州あるいはその周辺の各要所に配備されたと想定することもでき、そうとすれば、664年以降、西日本各地で進められた古代山城の築造工事をはじめ、山城以外の軍隊駐屯地の整備や軍事教練などにも、多くの防人の兵士達が携わったのではないか。年代的には後のことになるが、律令軍制のもとでは、大宰府、筑前、壱岐、対馬地域とともに、筑後平野にも防人の軍団が配備されていた。このことは、先述したように、侵略軍を筑後平野において殲滅するために、山城だけにとどまらず、平野の各所に軍隊を配置するという軍略のあったことを反映していると考えることができる。

ところで、防人として北部九州に派遣された兵士の多くが、東国つまり関東地方を中心とする地方の青年たちであったことは良く知られている。なぜ、東国だったのだろうか。その理由の一つとして、西日本地域の青年たちの多くが、朝鮮半島での戦争で戦死し負傷し捕虜となっていたので、兵士になる適齢期の男性が著しく不足していたから、東国から動員せざるをえなかったという見方がある。ことそれほど、朝鮮半島における敗北と、それに引き続く唐による征服戦争の危機は、日本列島の人々にとって、きわめて深刻なことだったのである。

では中央地域－畿内地域からの兵士動員はどうであったかという点、古代山城の中で唯一の近畿地方での古代山城である高安城は、先述したように、これまで確認されている西日本地域の古代山城の中で最大規模に設定されている。高安城は、侵略軍の最終目的地である、王宮の所在する大和飛鳥に侵入することを防御する、日本側の最終軍事拠点としての重要な役割が付託されていた。ましてや、王都の周辺には最大規模の防衛軍隊を配備していたに違いない。つまり防人として東国の青年たちを動員したのは、西国での兵士適齢世代の欠如と、近畿周辺での王都防衛兵力の大量確保の必要性ということが背景にあったのだ。

国を挙げての、そうした大規模な土木工事を伴う国防事業は、664年から数年の間に集中して遂行された。古代山城の築造が、帰化百濟人の指導により進められたことは日本書紀に記述されているところであるが、実際の遺跡の状況が朝鮮半島の各地で遺存している山城ときわめて類似していることから、近年使われなくなった“朝鮮式山城”の呼称は、この歴史遺跡の本質をあらわしている。

短時日のうちに大規模な城塞を建設するには、大規模な労働力集中による苛酷な工事と莫大な経費とが必要であったと推測される。この壮大な国防事業の遂行にあたり、特段の抵抗や反抗の形跡は残されていない。外国軍隊の侵略により国を失い、人としての尊厳を剥奪され、他国に隷属することの悲惨さに対する恐怖感、拒否感などの強い危機意識を、当時の日本列島の人々が共有していたからではなかったか。

6. 唐による征服戦争の理由

中華大陸再統一の実現

百済に対して、また日本に対して、唐は、なぜ征服戦争を挑んだのであったか。この根本的な歴史背景を理解しなければ、日本古代山城の意味だけではなく、6世紀末から8世紀初頭にかけての日本列島中央集権国家の構築の意味、さらには当時のアジア世界の歴史の変転の実相を理解することはできない。

7世紀代を中心とする時期、とくに6世紀末から8世紀の初めにかけての時期、日本列島の政治社会の動向は、中華大陸での情勢に強く影響されていた。さらに言えば、古代から現在に至るまで、日本列島の歴史状況は、常に中華大陸の情勢や海外からの営力によって決定的に動かされてきたとっていいだろう。

隋・唐による中華大陸の統一と周辺諸国に対する征服戦争

6世紀の末、589年に、中華大陸では楊氏の隋が南朝の陳を打倒し、南北朝を統一する。3世紀の初めに後漢が滅亡して以来、三国時代、五胡十六国時代、南北朝時代という争乱の時代を経て、ほぼ400年ぶりに統一帝国が成立したことになる。隋は国内の安定化が図られるとほどなく、周囲の国々に対する征服戦争を開始する。周辺の東アジア、西域、東南アジア諸国に軍事的緊張が走った。598年、602年の越南（ベトナム）への征服戦争や、609年から614年にかけての数度に及ぶ、しかもことごとく失敗に終わった高句麗への大規模な遠征など、隋は周辺国家に対しての覇権を確立しようとした。高句麗遠征では皇帝煬帝みずから113万（200万とも）の軍隊を率いて進撃したこともあったが、過重ともいえる兵士や兵站の徴発などが、国内での反乱を惹起し、618年、隋帝国は30年足らずで滅びる。そのあとを継いだのが李氏の唐王朝であった。隋滅亡後10年間の国内争乱状態を唐が鎮圧し、名実ともに天下平定が成就したのは628年のことである。

唐帝国の対外侵略

唐は天下平定の直後から、隋同様に周囲の国々に対して征服戦争＝侵略戦争を開始した。たとえば、北方の強大な遊牧帝国であった東突厥に対し、629年に大軍をもって攻撃を加え、翌630年に国王を殺害するに至り、東突厥は滅亡した。あるいは隋による執拗な侵略に苦しめられた高句麗は、631年に唐との国境に沿って千余里の長城を築き、唐の侵入を警戒したと史書に記述されている。この長城の総延長は800kmに及ぶもので、唐による侵略に対して、強い警戒感を抱いていたことがわかる。

そのような緊迫した東アジア情勢の中であって、大和政権だけが隋唐の対外圧力を座視していたとは考えがたい。すでに隋が成立した589年の直後、崇峻朝の頃から対外警戒策を講じ始めた形跡があり、次の推古朝に至ると、聖徳太子の執政や遣隋使の派遣などに表わされる国防

政策を展開し始めている。とりわけ、628年、唐2代皇帝・太宗のもとで達成された中華大陸平定という事態は、周辺諸国にはきわめて憂慮すべき脅威とうけとめられたのであった。もう少しその意味を追究してみよう。

中華思想と華夷秩序

中華帝国、とりわけ本来の漢民族ではない北方系の鮮卑族の出自になる隋や唐は、広大な中華大陸を統治するための大義名分として「華夷思想」を重要視していた。華夷思想というのは、中華民族こそが世界の中心であり、文明の頂点に立つ存在であるとする中華思想という、特定民族至上主義（エスノセントリズム）に基づく国家統治思想である。

中華帝国の至尊と位置づけられる中華皇帝の絶対的責務は、周囲の野蛮な国々に文明の恩恵を受けらるることであり、それにより文明化した国々は中華皇帝に朝貢する。この相互関係に立脚することによって、皇帝は中華帝国の統治権力が付与され、維持し、拡大しうる。したがって、服属する国が多ければ多いほど皇帝の権威は強大なものとなり、逆に一国でも服属を拒み叛旗を翻すとなると皇権は失墜し、統治権力が弱体化する。その結果、国内の安定が危うくなり、ひいては国そのものも滅びかねないというもので、華夷秩序は当時重視された唯一の統治思想の表現であった。

戦乱の時代を過ぎて

隋にしる唐にしる、それまでの大陸内での400年近くに及ぶ悲惨な戦乱状態に終止符を打ち、人々に平安な生活を保証しようという意識に促されて天下統一を目ざしたのであろう。唐としては国内の安定化をはかるべく統一を確固たるものにするためには、周囲の国々を強権的に服属させる必要があるという、一見矛盾した命題を追求しなければならなかった。文明の恩恵を与えるとはいえ、実態は軍事力により恫喝し、唐への服従を拒否すれば、630年の東突厥、640年の高昌など多くの国々のように、国自体が滅却されることもあった。

以上を要約すると、中華帝国は自身の国内権威確立・維持・拡大のために、華夷思想に立脚した国家秩序・国際秩序を構築したのであった。それは領土拡張欲に促されたものである、あるいは本質的に邪悪な、国家という存在が引きおこす必然的な現象である、などとする従来の歴史説明は正しくない。中華帝国にしてみれば、内部分裂による悲惨な状況を回避するために、当時の国家統治思想として不可避な行為であったとみる必要がある。周辺の諸国家にとっては、独善的かつ横暴きわまりないことであったことは間違いないが、これが歴史の現実であった。

7. 古代山城の否定

すでに言及したように、日本列島での古代山城の築造に、亡命してきた百済人の関与があったことが日本書紀に記載されている。660年の百済滅亡のあと、さらに663年の百済復興を賭

けた白村江の戦いの敗戦直後、政権の要人をはじめとする大勢の百済人が日本に渡来した。664年の時点で、唐軍の日本列島への侵攻を想定した防衛施策が発動されるが、日本書紀の大野城や基肆城の築造の記事からわかるように、その早い段階から、とくに山城築造について、亡命百済人達の軍事防衛に関する知見を活用したものと見られる。天智10年(671)に答体春初、憶禮福留らに、「兵法」のことで多大な貢献を果たした褒賞として高い位階を授与したことに示されるように、天智政権としては帰化百済人の功績を高く評価していたことがわかる。またこの記事は山城建設事業に一応の目処がついたことを示唆するものとも考えられる。

天智10年1月「大錦下を以て佐平余自信・沙宅紹明 法官大輔ぞ。に授く。小錦下を以て、鬼室集斯 學職頭ぞ。に授く。大山下を以て、達率谷那晋首 兵法にならえり。木素貴子 兵法にならえり。憶禮福留 兵法にならえり。答体春初 兵法にならえり。体日比子贊波羅金羅金須 薬を解れり。鬼室集信 薬を解れり。に授く。小山上を以て、達率徳頂上 薬を解れり。吉大尚 薬を解れり。許率母 五經に明らかなり。角福牟 陰陽にならへり。に授く。小山下を以て、餘の達率等、五十餘人に授く。」

百済での山城事情

百済地域における古代山城についてみると、百済の版図の中核部であった現在の忠清南道で確認されている230カ所の山城の規模をみると、周長が1600mをこえるのは11カ所、4.8%であり、日本列島での古代山城の状況と著しく異なっていることが指摘されている⁽²⁰⁾(日本列島で最小の古代山城である唐原城の城壁の周長は1.7km/忠清南道8214km²・兵庫県8396km²)。

朝鮮半島では、百済だけでなく、高句麗、新羅でも山城が盛んにつくられ、かつて朝鮮総督府がおこなった調査に基づく『朝鮮宝物古跡調査資料』(1924年)によれば、城跡の数は1650を超えるとされている⁽²¹⁾。日本列島では7世紀後半の限られた時期に集中的に築造されたのであったが、朝鮮半島での員数には、三国時代以後の高麗期のものや豊臣秀吉侵攻の際の倭城なども含まれるようなので、7世紀段階での実態がどうであったのか、詳しい全体状況は判然としない⁽²²⁾。1、2世紀のころから築造が開始され、4世紀以降の三国抗争期には順次多くの山城が各地に造られた。また「13世紀から17世紀までの間、外敵の侵入ごとに拡張、補強をくり返した」⁽²³⁾のであり、山城群の全体的なありようは、きわめて複雑な様相を呈しているものと思われる。

しかし、発掘調査で明らかにされている城壁、水門の構造や、大型の山城の地形的状況などが共通しているので、日本列島の古代山城が、軍事構築物として、朝鮮半島由来の技術を駆使して築造されたことは間違いなく、その際に、帰化した百済軍事技術者達の全面的な指導があったことも確かなことである。日本列島における山城群構築の計画立案が、すべて百済人の手によって遂行されたかどうかについては検討の余地があるものの、先に示した日本書紀の贈位記事にみられる「兵法にならえり」つまり兵法に習熟していることから、孫子や六韜をはじめとするさまざまな中国の兵法書などに説かれた戦略や、朝鮮半島の三国間での抗争の中で培わ

れた具体的な軍略に関する知見などを駆使して、日本列島の王権護持のための山城群構想が練り上げられ、実施設計、施工といった大事業が進められたとみて大過ないだろう。

古代山城無益論（1）

660年に唐が新羅と連合して百済を滅ぼした660年の時点で、百済領内に多くの山城が存在していたことは、三国史記や日本書紀あるいは旧唐書や資治通鑑などの記載からもうかがいすることができる。たとえば旧唐書の黒齒常之伝によると、百済の達率（二品官）兼風達郡将であった黒齒常之は、660年（唐・顕慶5年）8月に百済が滅亡したあと、「それまで指揮していた部隊を糾合して、任存山城において唐に叛旗を翻し、呼応する百済の旧軍兵士3万が参集するまでになった。唐将、蘇定方は兵を派遣して任存城を包囲したが、黒齒常之は配下の軍兵の中から精鋭を選び、包囲する唐軍に果敢に奇襲を試みて、唐の攻囲軍を打ち破った。唐軍は大敗を喫して逃亡した。黒齒軍は逃げる唐軍を追撃し、200余城を回復した」などとあり、少なくとも200をこえる数の山城があったことがわかる⁽²⁴⁾。

留意しなければならないことは、百済の領域にあったこれら多くの山城に課せられた役割は、泗泚都城（扶余）とそこに所在する王宮の主である百済国王を防護することであったという点である。しかるに、660年（百済：義慈王20年、新羅：武烈王7年、日本：斉明天皇6年、唐：高宗・顕慶5年）6月21日に、新羅の太子金法敏と唐軍の將軍蘇定方が朝鮮半島西海岸の徳勿島で邂逅してから、唐・新羅連合軍による包囲攻撃で泗泚城が陥落する7月13日まで20日余りである。しかも唐軍は徳勿島で10日以上、黄海を渡海した疲労を解くために休息をとったとされているので、百済を功陥するのに要した日時はわずか10日ほどであった。数多くの山城は、いったいどれほどの軍事的機能を果たしたものであったかということが問われなければならない。

然り、百済での山城群を基軸にした国家防衛方式は、唐の侵略軍の攻撃に対して、有効な軍事機能を発揮しえなかったのである。

8. 飛鳥王宮の時代 — 外圧と王宮遷移

飛鳥王都の造営—630年・歴代遷宮の途絶

日本側では、唐の侵攻に対抗すべく、山城群を数段階におよぶ敵軍攻略作戦を遂行するための機能を持たせた山岳城塞ネットワークとして構想したと考えるが、すでに述べたように、侵略軍の最終標的は飛鳥王都の主権者である。

飛鳥に最初に造営された王宮は、舒明朝の630年の飛鳥岡本宮^{あすかのおかもとのみや}であった。それ以前は、奈良盆地の南半部の各所で、大王（天皇）の代替わりごとに、新たな場所に新たに王宮が造営されることを常としていた。これを歴代遷宮という。ところが、飛鳥岡本宮以後、飛鳥での王宮は

同じ地点での造営がくりかえされることになる⁽²⁵⁾。

奈良県高市郡明日香村・岡で、この半世紀にわたって発掘調査が進められている飛鳥宮跡では、宮殿遺構が上中下の3層に重なっており、下層が630年に王宮となった舒明朝の飛鳥岡本宮、中層が643年の造営になる皇極朝の飛鳥板蓋宮^{あすかのいたぶきのみや}、上層が655年に新営された後飛鳥岡本宮^{のちのあすかのむか}である。後飛鳥岡本宮は斉明天皇没後も中大兄皇子の王宮として使用され、672年の壬申の乱後に即位した天武政権は、この宮殿群の南東に大極殿区画を付加して、のちに飛鳥浄御原宮^{あすかのきよみはらのみや}と呼ばれることになる。

618年に隋を滅ぼした唐が中華大陸での覇権を掌握し、10年間の国内平定戦争を経て天下統一を達成したのが628年のことであった。唐は早々に周囲の国々を華夷秩序体制に組み入れるべく、征服戦争を展開する。飛鳥の王宮は東西幅が200m、南北は1km内外の狭隘な谷地形の、もともと奥まった地点にある。南と東、西の3方を丘陵や山地で囲まれ、谷地形の北側に開口する場所には、590年代に造営の進められた法興寺（飛鳥寺）の七堂伽藍が、北側に広がる広やかな奈良盆地と飛鳥谷を遮る形で存在している。

630年に王宮を飛鳥に遷したのは、628年の中華大陸平定に続く唐による対外征服戦争の脅威から王権を防護するために、天険の要害と判断した飛鳥谷に王宮を緊急避難させたことを意味している⁽²⁶⁾。当時は舒明政権下で、政府の実質的な主導権は大臣蘇我蝦夷にあった。政権は唐の軍事的脅威に対して、王権護持のために、王宮を飛鳥谷の奥に避難させたのであったが、遷宮に2ヵ月先だつ630年8月に、犬上君三田稻を長とする第1次遣唐使を唐に派遣する。通説では、626年の唐第2代皇帝太宗の就任を祝賀する遣使であったとみなされているが、それだけではなく、遣唐使による外交折衝を通じて、唐の日本列島侵略を回避しようとしたとみるべきであろう。

なぜ大和飛鳥が王宮の地として選択されたのかというと、①飛鳥の地が、当時天皇家ときわめて密接な姻戚関係を持ち、政権の実質的な領導者であった蘇我氏（蘇我本宗家）の勢力下にあり、②数世紀来同盟関係にあった百済の王都（泗沘城や熊津）の自然地形を利用した防衛方式を参考にしたからだと考えられる。

645年・難波宮遷都

645年6月、飛鳥宮跡中層宮殿である飛鳥板蓋宮の「大極殿」を舞台とした、乙巳の変と呼ばれる政変の直後に即位した孝徳天皇の政権は、12月に難波宮に遷都する。1960年代以降の発掘調査を通じて、難波宮の宮殿官衙遺構は飛鳥のそれよりも格段に大規模化し、とくに後代、朝堂院と呼ばれることになる政務・儀礼のための広大な宮殿空間が設けられていったことなどが明らかにされている。

壮大な宮殿空間

難波長柄豊碕宮^{なにわのながらのとよさきのみや}（以下、この項では「難波宮」）は東西600m以上の範囲で、南北幅はさらに

長いと推定される。中央には内裏と朝堂院が南北に並ぶ。朝堂院は東西 233m、南北 281m の大空間で、内部には朝庭をめぐって 14 棟以上の朝堂が東西対称に配置される。ちなみにこの朝堂院は、現在のサッカーコートの 10 倍近くの広さになる。朝堂院の正南方には、朱雀門に相当する王宮南門があり、両翼に複廊回廊がとりつく。朝堂院の東方には「東方官衙」と、単廊回廊で囲まれた「東方郭」があり、内裏の西方には倉庫群からなる西方官衙がある。このような難波宮の広大な朝堂院と数多くの官衙からなる宮殿施設は、前代までの王宮と比べると数倍の大きさであり、改新政権の強大な力によって初めて生み出されたものであった⁽²⁷⁾。

無防備な王宮－難波宮

注意すべきことに、難波宮は、旧地形復元によれば、南北に細長い半島状の台地の北端近くにある。東西幅 2km ほどの馬の背状の地形であるこの上町台地の西縁は、7 世紀頃には天満砂洲を挟んで難波乃海（大阪湾）に接し、東側は難波潟と呼ばれた潟湖（内湖）であった。仮に唐軍が船団を組んで王権中枢部を攻撃しようとするれば、瀬戸内海に直面した難波宮は、文字通り全身を敵軍に晒した、きわめて無防備な立地条件下にあった。飛鳥が唐による侵攻からの避難場所であったと理解するならば、難波宮の無防備さが、ことのほか異常に映じる。

従来、難波宮に遷都したことの理由として、飛鳥の旧勢力から遠ざかる必要があったなどとの説明がほどこされているが、その後わずか 10 年足らずで、王宮は再び、狭い飛鳥に戻されるのであるから、その理解は見当違いであろう。そうではなく、防衛外交という観点から孝徳朝の史的位置付けを再考察する必要がある。飛鳥に再び戻ったことからすると、難波への遷都はきわめて冒険的な試みであったのだと思う。

653 年・飛鳥への帰還

653 年になると、孝徳天皇と中大兄皇子に対立が生じたとされ、中大兄は母・皇極前天皇、妹で孝徳天皇の後であった間人皇后、重臣の中臣鎌足らとともに飛鳥に戻る。難波に残った孝徳は翌年崩御し、655 年、齐明天皇は皇極朝の王宮であった飛鳥板蓋宮で即位する。この冬、板蓋宮は火災にあい、川原宮を仮宮とし、656 年に舒明朝以来飛鳥王宮のあった地に後飛鳥岡本宮を造営する。

飛鳥から難波へ、そして飛鳥への帰還という王宮の移動は、中華大陸や朝鮮半島における唐の軍事圧力を軸にした、めまぐるしく変動する国際政治状況と、それに対する大和政権の対唐・百済・新羅・高句麗外交防衛策の変転の反映として把握する必要がある。地形的にみて、後飛鳥岡本宮に、難波長柄豊碕宮で実現した広大な朝堂院を造営する余地は、まったくない。なによりも、652 年 9 月に完成したばかりの、高く評価されている難波長柄豊碕宮であったはずだが、翌 653 年、中大兄皇子一派は飛鳥への帰還を決断する。つまりわずか 1 年たらずのうちに難波宮の放棄を企図しているのである。

孝徳朝期での中央集権国家構築という施策にとって画期的であった広大な朝堂院が、後飛鳥

岡本宮で欠如しているのは、狭隘な、しかし防御に適した飛鳥に王宮を戻さざるをえない切迫した事情があったからだと考える必要がある。それは 630 年の飛鳥岡本宮遷宮の原因と同様に、唐による軍事的脅威に対応したもので、難波では、唐の侵略に対しての防御が困難であるという判断が浮上したからであったとみられる。

唐の脅威たかまる

当時の状況を東アジア全体でみると、唐による周辺地域に対する軍事的攻略と征服はいっそう熾烈になり、西域にあった吐谷渾（635 年）、高昌（640 年）、焉耆（644 年）、薛延陀（646 年）、龜茲（648 年）、西突厥（658 年）などの諸国が次々に滅ぼされている。

朝鮮半島方面では、唐は隋代以来の懸案である高句麗討伐を 645 年、647 年、648 年、658 年とくり返すが、失敗に終わる。そうした中、660 年に、わが国の同盟国であった百済が、新羅と連合した唐の軍隊により滅ぼされるという事態が出来た。そうになると、朝鮮半島に拠点を確認した唐による次の征服の対象が日本列島になることは自明なことであった。

百済救援軍の派遣

大和政権は百済を再興するための援軍の派遣を決定する。661 年、派遣軍を率いた斉明女帝は、その途次、筑後の朝倉宮で突然、崩御した。日本書紀では死因について、伝染病であったかのような曖昧な記述をしているが、斉明天皇は、支援軍の発遣を阻もうとする、なんらかの謀略によって死に至ったのではないかと憶測される。

斉明女帝の死後、中大兄皇子は天皇に即位することなく、7 年の間、皇太子の立場のまま軍政の最高指揮を執ることになり、長期間にわたる天皇不在の異常事態の時期を迎えた。

飛鳥不定型都城の構築

大和政権の本拠地であった後飛鳥岡本宮を擁する飛鳥でも、より強固な防衛施設を構築しようとしていたことが、発掘調査で明らかにされている。630 年の時点では、険しい地形に守られた、飛鳥の狭隘な平地の最奥部に王宮を造営したのであったが、さらに危機が迫った情勢の中で、飛鳥を取り囲む丘陵の尾根上に沿って城壁を構築した形跡が認められるのである⁽²⁸⁾。

この防御のための城壁は、すなわち羅城である。飛鳥の防御方式の参考とした百済の泗泚城でも、羅城は王都防衛にとって重要な施設であった。泗泚城の北と東の丘陵の尾根筋にそって、延々と続く、基底幅が 10m を越える大規模な羅城の跡が、いまも扶余に残っている。飛鳥での防御壁は掘立柱塀の構造体であるので、“城柵”と形容すべきかもしれない。城壁つまり羅城で囲まれた王権の所在地を都城とする言葉の定義に従えば、この後飛鳥岡本宮の時期の飛鳥こそ、わが国最初の都城と称すべきものであった。

667 年・近江大津宮遷都

中大兄皇子政権は、このように飛鳥の守りを固めたはずであったが、それでもなお不十分と判断したのであろう、飛鳥を放棄して、琵琶湖の西岸、大津に新たに王宮を造営する。667 年

のことであった。翌 668 年正月に中大兄皇子はこの大津宮でようやく天皇位に即位し、のちに天智と諡おくりなされる。

大津宮跡については、琵琶湖西岸の大津市錦織地区での発掘調査を通じて、王宮の中枢部である内裏と推定される掘立柱建造物群が確認されている。いっぽう、内裏の南に接して、難波長柄豊碓宮とほぼ同規模の朝堂院が想定されているが、この復元は妥当ではない。

朝堂院の非在

難波長柄豊碓宮で出現した広大な朝堂院は、そのあと 40 年の時を隔てて、藤原宮で再現する。藤原宮以降は平城宮、恭仁宮、長岡宮、平安宮と踏襲されるが、そのいずれにおいても、朝堂院の内庭は北端と南端との標高差が 1~4m という、南北にわずかに傾斜した平坦面になっている。いっぽう大津宮で朝堂院に想定されている東西 200 数十メートル、南北 300m ほどの一帯は、北西から東南にかけて標高差 12m ほどの、かなり急な傾斜面であり、この点からだけでも、大津宮に朝堂院が備わっていた可能性はないと判断しなければならない。

大津宮の内裏推定地区も、北西から南東方向の傾斜地にあり、標高差は 12m ほどある。飛鳥王宮以後、平安宮に至るまでのほかの王宮では、およそ 200m 四方の範囲の中で、いずれも 2 m 前後であり、大津宮の内裏の立地する地形の特異性が際立っている。大津宮に伴う矩形都城の存在を主張する説もあるが、これも大津宮の存在形態の異例さや周辺の地形などからすると、想定しがたい。

大津宮は、西に迫る比叡山地の急峻な山塊と、東に広がる琵琶湖とに挟まれた狭い場所に立地している。宮殿群は複雑に傾斜した高台上の狭隘な場所に造営されており、恒久的な王宮として造営されたとは思えない状況を示している。いうまでもなく、この大津宮の地は、瀬戸内海を経て侵入してきた唐軍の攻略に対して、飛鳥よりも格段に防備に適しているとみなされたに違いない。東に接して琵琶湖があることも防御の利点として考慮されただろう。大津の周辺に、それ以前から百済系の渡来人集団が居住していたということもまた、大津宮遷都の理由の一つかもしれないが、いずれも、唐による侵略の危機が逼迫していたことを示すものである。日本書紀では、古代山城の築造記事は、大津宮の時代、670 年の「高安城修理。また長門城一、筑紫城二を築く。」が最後となる。

古代山城無益論（2）

以上に述べたように、中大兄皇子政権は山城群や飛鳥羅城さらには大津宮の造営に際して、いずれも百済の王都防衛方式を採用したといえる。問題は、そのように、すでに無益であるということが明白になっていたはずの百済式の王都防衛方式を日本列島防衛に導入したのは、なぜなのかということになる。亡命百済人達の強い懇願と、それを是として受け入れた日本の政権側の意図があったと思われるが、明解な解答は見いだせない。

天智政権の終焉

669年、中大兄皇子政権つまり天智天皇政権の最重鎮であった中臣鎌足が死去する。鎌足は死の直前に天皇から藤原の姓を賜る。671年、天智帝も、むしろ突然とも映じる死を迎える。天智天皇の子息の大友皇子と天智の弟（と日本書紀では扱われている）の大海人皇子との間で争われた、皇位継承を理由とされている国内戦争—672年の壬申の乱のことは人口に膾炙しているところだが、この乱の真因は通説とは別にあると考える。

天智天皇の死に関しては、以前から暗殺されたのではないかとする説がある。鎌倉時代に成立した扶桑略記や水鏡などの歴史書に、天智天皇は行方不明のまま消息を絶ったとされている。天智天皇は、ある日、馬に乗って、山科の林野の中に行ったまま、帰ってこなかったというのだ。周りのものが探しにいくと、天皇の履いていた靴が落ちていたので、その場所に御陵を作った。それが今に残る山科の天智天皇陵だというのである。扶桑略記には、さらに、「以往（“以後”あるいは“これまで”）、諸天皇は恒^{つね}に殺害を事とせり」という、およそ尋常ではない記述が続いている。

従来、幾人かの歴史家が、この扶桑略記の記事などを根拠として天智天皇暗殺説を説いている。私も、天智天皇は大海人皇子の勢力により暗殺された可能性が強いと考えている。強いて排除しなければならなかったのは、次の天皇の位を狙ったからだなどというような卑小な理由では決してない。

古代山城研究の陥穽

ここで、一部くり返しになるが、日本列島での古代山城の展開を通観しておこう。朝鮮半島での動乱—唐による征服戦争—を受けて、中大兄皇子政権は、大和飛鳥そして近江大津の王都を防衛するために西日本要塞化政策を推進したのであったが、それは百済からの亡命貴族や軍人、軍事技術者達の指導と貢献のもとに遂行された。そうした防衛のありかたは、いずれも百済の方式を導入したものであった。しかし、660年6月21日に唐軍が百済の一面に上陸して王都泗沘城（扶余）陥落の7月18日まで、までわずか1ヶ月余りしかなく、王都は攻撃開始から数日の内に陥落し、百済は滅亡した。百済王都の防衛方式、すなわちわが国で構築されようとしていた防衛方式は軍事的には無益なものであったということが、660年の段階ですでに明証されていたはずなのである。

百済を初め、新羅でも高句麗でも数多くの山城が築造されていることはよく知られている。それらは数百年の間くり返されてきた三国間での争闘には有効であったかもしれないが、唐の大規模な軍勢、しかも大陸で展開されてきた諸国征服戦争で戦い慣れしている唐の軍隊による攻撃に対しては、きわめて無力な存在であった。それにもかかわらず、天智天皇とその政権は百済式防衛方式の実現に全力を傾注するが、これは天智政権の決定的な失政であった。日本列島を唐の攻撃から防衛するための懸命の施策であったことは間違いないだろう。しかし、方法

を間違っでは、守るべきものも守りえない。このままでは、日本列島は唐に容易に蹂躪されかねないという深刻な危機感を抱いた人々がいたと、私は考えている。それが大海人皇子とその勢力だったのである。

672年・壬申の乱の真因

672年の壬申の乱は国家防衛策についての路線闘争であったとみる。天智政権の推進した西日本要塞化方策では、唐の軍事的侵略に対して有害無益であるとの判断にたつて、大海人皇子側の勢力が天智政権の排除を断行したのではなかったか。大海人皇子は、中臣（藤原）鎌足の669年の死を契機にして、わが国の国防政策の大転換を図る決断をしたのだと思う。そのことは、次に述べるような、壬申の乱の後に大海人皇子すなわち天武天皇の政権が推進したさまざまな施策に明らかである。

9. 古代山城の時代を超克して

天武政権の発足

672年の壬申の乱に勝利を得た大海人皇子は、飛鳥に帰還し、翌年、後飛鳥岡本宮で天皇に即位する。天武天皇である。天武の政権は飛鳥の地に王宮を新たに造営することなく、後飛鳥岡本宮の一部を修復し、大極殿区画を付設するにとどめた。のちに飛鳥浄御原宮あすかのきよみはらのみやと改称される。

唐軍侵略危機の継続

壬申の乱直後の672、673年当時、唐による日本列島の軍事的制圧という危機は依然として継続していた。唐が朝鮮半島の直接支配を断念するのはさらに数年の後、676年のことである。それも完全な撤退ではなく、新羅はそれ以後も唐の強力な統制下にあり続けた。新羅国王とは唐皇帝により冊封された地位であり、朝貢をはじめとして、服属国としての苛酷な運命を余儀なくされたのであった。

そうしたいまだ緊迫した国際情勢下にあつて、防衛上きわめて有効とされていたはずの大津宮を放棄した理由は、天武新政権の国防施策のありようの中に示されている。天武政権は、これまでの防衛施設建設路線を無益のものとして撤廃し、わが国に強靱な統治体制を作ることにより外敵の侵略を防ぐ方策に転換した。推古朝以来ゆるやかに進捗してきた統一国家形成への歩みを、格段に加速させたのである。統一国家あるいは中央集権国家の構築とは、すなわち列島規模の国防国家を作り上げることであった。

朝鮮半島では、天智天皇が即位した668年に高句麗が唐と新羅の攻撃で滅亡し、宝蔵王は捉えられた。しかし、これより以後、唐と連合して百済、高句麗を滅ぼした新羅も、唐による制圧の危機を迎えることになる。新羅は朝鮮半島の統一を企図して唐の軍力を援用する策を選択したのであったが、華夷秩序の構築を至上目的としている唐が、何の利得もなく大軍を渡海

させて犠牲をはらうとは考えがたい。高句麗が滅ぼされた 668 年ないし 669 年のこととして、「唐が艦船を修理して、表面的には倭国を征伐するというが、実は新羅を討とうとしている」という情報が流れ、新羅側を恐れさせたという記事が『三国史記』にある。同じ 669 年に、新羅は唐の意向を無視して、新羅は唐が占領管理していた旧百済領の攻略をはかり、そのことで新羅は唐に謝罪使を派遣するという事態となった。671 年になると、旧高句麗領内にある鴨緑江を渡って、新羅軍と高句麗復興軍との連合軍が唐軍と対戦し、旧百済領の泗泚城南方では新羅軍と唐軍の戦闘があり、新羅軍は唐占領地の百済人を含む唐軍 5200 を斬首する戦果をあげたという記録が残されているなど、新羅と唐の軍事衝突が本格化した。羅唐戦争あるいは新唐戦争と呼ばれている。

この羅唐戦争は 676 年に重要な転機を迎える。数年前から唐は西南に国境を接する吐蕃（チベット）との軍事抗争に苦慮していた。唐の朝廷にとっては軍事強国である吐蕃対策が、より深刻であったらしく、吐蕃との戦争に力を注ぐために、新羅との戦線から離脱せざるをえない状況に追い込まれていた。このように、唐が新羅の直接支配を断念するのは 676 年のことであるから、673 年の天武政権発足時点では、唐による日本列島侵略・征服戦争の危機は依然として継続していたのである。

律令制度導入の意味

そうした状況下にあって、天武政権は、中央集権国家の構築への動きを促進しようと、さまざまな施策を講じていく。その際、唐の制度を参考にするほか無かったのは、当時において唯一にして最善の統治方式とみなされていたからとはいえ、実に歴史の皮肉というべきであろうか。国家体制の根幹は律令制度である。律令の編成、歴史書の編纂、貨幣・富本銭^{みほんせん}の铸造、宮廷儀式の整備、神道・仏教などの宗教政策の整備など国家体制を整えるための施策や、地方行政制度の確立、地方官道網の建設、軍制の整備など、国家をあげての防衛力の充実策が推進された。いずれも隋・唐の中央集権国家体制を参考にしたものであった。

なにゆえに中央集権国家かと言うと、朝鮮半島では数百年来、高句麗、新羅、百済三国が鼎立して、ときには半島南部の領域に勢力基盤をおいていた倭国も巻き込んで、相互に争乱をくり返してきた。結局、唐はその分裂状態を利用すべく、典型的な遠交近攻策を駆使して朝鮮半島を実質的に制圧したのである。日本列島においても、内部が分裂し、あるいは相互に牽制しあう勢力が分立していれば、外敵の介入を容易にしてしまう。こうした危機感が、列島の総意として、中央集権化を強く志向させる動因になったことは確かであろう。

10. わが国最初の矩形都城の建設 — 天武の都・藤原京

中大兄皇子政権＝天智政権が推進した西日本列島要塞化事業は、天武政権になると放擲され

る。天武政権は、百済の王都防衛方式が 660 年の唐の攻勢に対して無力であった現実を踏まえ、その限界性を認識していたと考えられる。22 の古代山城のうち、唐原城、阿志岐城、鹿毛馬城、女山城、おつぼ山城、播磨城山城はいずれも築造工事が中断された様相を呈しており、杷木城、石城山城、讃岐城山城、高良山城もまた未完成であった可能性が指摘されている⁽²⁹⁾。こうした築造工事途絶を示唆する状況の背後に、山城群全体を律する統一的な管轄機構のもとで一斉に中止措置がとられたという事態を想起することは不自然ではあるまい。

天武政権は、壬申の乱を通じて天智政権を排除したあと、新たな国家防衛方式の完成に施策を集中させる。それが中央集権国家の構築を促進することであり、その最も象徴的な事業が矩形都城・藤原京の建設であったのである。

藤原京の建設計画は、壬申の乱後ほどない時点で着手されたとみられる⁽³⁰⁾。当初、新城と呼ばれ、のちに新益京（シンヤクキョウ・あらましのみやこ）そして藤原京と称された⁽³¹⁾。

正方形都城・藤原京

飛鳥王宮や大津宮、難波宮とは一転して、広闊な奈良盆地のただ中に、わが国初めての矩形都城の建設が進められた。藤原京は 5.3km 四方の京城で、10 条 10 坊（＝10 里四方）の条坊が設定されていた。条坊道路には大路と小路があり、唐長安城や、のちの平城京と同様の規格性に富んだ都城造営が行われた。藤原宮は京城の中央にあり、約 1km 四方の宮域内の中軸線上に朝堂院、大極殿院、内裏が配置される。宮域を区画する大垣には東西南北の各面に各 3 門、合計 12 の宮城門が開くなど、以後の日本の都城の基本形が備わることになった。

ただし、発掘調査の成果をみると、藤原京には、東アジアの都城に通有の羅城つまり都全体を囲む城壁が作られていなかった可能性が強い⁽³²⁾。

羅城のない都城・藤原京

都城として本来備わるはずの羅城の、藤原京での非在という状況は、天武ないし天武政権の意志の表現だと思う。天武政権は、前述のように、天智政権の採った防衛施設建設推進策を否定する路線を選択した。それは単なる政策の相違という次元の話ではなく、国家とそこに住む人々の命運を賭けた判断であったはずである。前代の天智政権で追求されたのは、水城や山城群の築造であり、いずれも堅固な城壁を伴った軍事施設であった。天武政権は、そうした防衛機能を発揮すべき城壁＝羅城を、意図的に忌避したのだと思う。無駄な抵抗施設を作ったところで、外敵の大軍を前にしては、防御の機能を期待することは不可能であり、むしろ羅城を意図的に排除し、制度としての国防体制を強固にするという政治姿勢を顕示しようとの意図に基づいて、敢えて羅城を構築しなかったのであったとみる。

隋の大興城・唐の長安城

わが国が規範とした中央集権国家・唐の最も象徴的な、そして実質的な中枢施設、それが都城・長安城であった。長安城は、はじめ隋が大陸統一を果たした 589 年に建設されたもので、

大興城と名付けられた。隋の滅亡後、唐が首都として引き継ぎ、長安城と改称した。

長安城は東西 9721m、東西 8651.7m という横長の矩形をした大規模な都城であった。中央街路である朱雀(大)街は幅が 150m。こうした都城の圧倒的な巨大さは、唐という国家の、ひいては皇帝の権力の大きさを視覚的に示威しようとしたことを示すものである。つまり、長安城に参入する時、眼にするだけで、皇帝に反抗しようという意志を阻喪させるための、壮大な政治的舞台だったのである。誇すべき相手は、華夷秩序に基づいて中華皇帝に服属すべき蕃国の人々、なかでも朝貢のために参内する諸国の外交使節であった。

この点を理解すれば、日本列島を中央集権国家として作り上げようとした天武政権の最も重要な事業が、大陸式の巨大な矩形都城を実現することであったと理解することは容易であろう。

『周礼』王城像

わが国初めての矩形都城・藤原京であるが、1980年代までは、のちの平城京よりも小規模で、面積でみると3分の1以下であったと説かれてきた。ところが1996年の春に行われた発掘調査の成果に基づいて、藤原京は平城京よりも大きく、東西・南北とも5.3kmの正方形の矩形都城で、内裏や朝堂院のある王宮・藤原宮はその中央に置かれていたことが明らかになった。

宮城(=王宮)を中央に置き正方形の全体形をした都城は、中華大陸の都城史でも未曾有のものであった。この形は、隋や唐の時代に理想とされていた、古代の周の国制を伝えるとされる『周礼』に示される規範的な王城の姿を、強く意識したものであった⁽⁸³⁾。藤原京ほど『周礼』に忠実な正方形都城は、横長の長方形である長安城も含めて、それ以前も以後も、中華大陸4000年の都城史には存在しない。

国家防衛策として強靱な中央集権国家体制の構築をめざした天武政権が、その象徴的存在として理想の都城の実現をはかったのが藤原京であったのである。ただし、『周礼』には、王城は「九里」四方であるべきと記述されている。藤原京は10里四方の全体規模である。長安城の都城正門である明德門から皇城正門の朱雀門までの距離は、中央街路である朱雀街の延長距離に相当するが、これが10里の長さに設定されているので、藤原京を計画した時に、長安城の規模を象徴する規模である10里規格を導入したものとみられる。また、藤原京の街区の基本形は1里(=1800尺≒531m)四方の“坊”であるが、この規格は後の平城京、平安京にも踏襲される。これも唐長安城の坊里が2里×1里の基本規格であったことを参考にして設定したものとみられ、藤原京の設計にあたって長安城を強く意識していたことがわかる⁽⁸⁴⁾。

藤原京は「天武の都」であった。天武天皇とその政権は、推古朝以来の大和政権の重要な政治意識であった「天皇を中華皇帝と同等に位置付ける」という、当時の東アジア世界では異例の国家秩序観を表明する。のちに成立した大宝律令には、天皇=天子・皇帝と明示されているのである。天武は中央集権国家の象徴的存在であるべき都城を造営するに際して、当時の世界規準である長安城を参考にしながらも、中華文明圏で理想とみなされている周礼王城像を実現

しようと考えたのであった。

11. おわりに — 古代国家の構築と都城・山城

589年に隋が中華大陸を統一したことを契機として、アジア世界は、華夷秩序構築をめざした隋による、周辺諸国に服属を迫る征服戦争という軍事的脅威に曝されることになった。日本列島でも推古朝の政治改革、遣隋使の派遣など、国防を意図した施策が講じられた。

618年に隋を倒して中華大陸の覇権を掌握した唐が、10年間の内乱平定を経て、628年に隋同様の征服戦争を開始した。これに対応して、大和政権は、それまで奈良盆地の一面に所在していた王宮を、険しい地形に囲まれ、防御に適すると判断した飛鳥の最奥部に移し、同時に遣唐使を派遣するなど、国家防衛の度合いを一段と進めた。これが舒明政権、630年のことである。

その後、唐帝国は周辺諸国への軍事的攻略をさらに展開するが、高句麗、新羅、百済の朝鮮半島の3国は、唐に臣従する姿勢を示しながらも、相互に半島での主導権を巡っての戦争をくり返す。640年代を中心として、3国それぞれは、唐の強大な圧力に対抗するために、挙国体制を構築する政治改革を断行する。大和政権における645年にはじまる大化の改新政治も、朝鮮半島諸国と同様の、中央集権化をめざしての政治変動であった⁽⁸⁶⁾。

唐は、660年、百済を滅ぼすに至る。それまで数世紀におよび百済と同盟関係にあったわが国は、唐による侵略の直接の対象となりかねない危機事態に陥った。時の中大兄皇子政権は、唐が日本列島に侵入し、飛鳥王都を攻撃し、わが国の王権を打倒することを防ぐために、亡命してきた百済人たちの力を借りて、北部九州から瀬戸内海沿岸にかけての地域に、朝鮮半島で通有であった軍事要塞である山城を主軸とした対唐防衛戦線を構築する事業を、665年から670年のころに集中的に進めたのであった。

しかし、その防衛方式は、規範とした百済において、唐の大規模な軍勢力の前には、しごく無力なものであったという事実がすでにあり、根本的な欠陥を内包していたはずであった。おそらく、その危険性にいち早く気づき、防衛施設構築至上路線の大転換をはかったのが、大海人皇子の勢力であった。672年の壬申の乱を通じて中大兄皇子=天智天皇の政権勢力を排除したうえで、天武天皇(大海人皇子)を首班とする新政権は、山城などの防衛施設に依存することなく、強固な中央集権国家体制を築くことで唐の軍事的介入を回避するために、さまざまな施策を促進した。

中央集権国家の規範は唐にある。唐の国家制度すなわち律令制度を積極的に導入して、外敵を防御することの可能な国防国家構築を進めたのである。

日本列島における古代山城構築の歴史について、私は“失政”であった、と記述した。いうまでもなく、さまざまな思いをはらみながら、当時の人々は、より良い方策を追求したに違いない。しかし、何が最善であるのか、時代の当事者にはわかりにくいものであることは、長い歴史の出来事の数々が教えているところである。いま私達に課せられているのは、歴史の流れを、なんらかの決めつけられた考えに当てはめて判断するのではなく、確かな事実を見きわめて、往時の社会なり世界なりのありようの中で、正しく理解していくことだろう。(了)

注

- 1) 向井一雄「IX-2 山城・神籠石」『古代の官衙 II 遺物・遺跡編』奈良文化財研究所編、2004年。
- 2) 古代山城についての学史的理解は『北九州瀬戸内の古代山城』小田富士雄編、日本城郭史研究叢書 第十巻、名著出版、1983年／『西日本古代山城の研究』小田富士雄編、日本城郭史研究叢書 第十三巻、名著出版、1985年に詳しい。また向井一雄「研究史・古代山城―神籠石から研究課題まで―」『季刊邪馬台国』108号、梓書院、2011年での確かに総括されている。
- 3) 文献史料には場所が確定していないものの、古代山城であったと考えられるものが以下のようにある。
 - a. 長門の城：『日本書紀』天智4年(665)(この年に築城。)
 - b. 三野城・稲積城：『続日本紀』文武3年(699)(大宰府管内に所在。この年に修築。)
 - c. 茨城：『続日本紀』養老3年(719)(備後国安那郡所在。この年に廃止。)
 - d. 常城：『続日本紀』養老3年(719)(備後国鞆田郡所在。この年に廃止。)
 - e. 三尾城：『続日本紀』天武元年(672)(近江国高島郡か。)
- 4) 各山城の名称は、稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第34号、日本考古学協会、2012年での呼称に準じる。
- 5) 向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『溝漣』第9・10合併号、古代山城研究会、2001年。
- 6) 渡辺正気「神籠石の築造年代」『考古学論叢』中巻、吉川弘文館、1988年／西谷正「朝鮮式山城」『岩波講座日本通史』第8巻、岩波書店、1994年／小田和利「神籠石と水城大堤」『九州歴史資料館研究論集』22、1997年／狭川真一「朝倉橋廣庭宮と筑紫」『古代文化』51-1、1999年／阿部義平「古代山城と対外関係」『人類にとって戦いとは④攻撃と防衛の軌跡』国立歴史民俗博物館監修、東洋書林、2002年など。
- 7) 赤司善彦「古代の山城とその背景」『日本海域歴史大系 第1巻 古代篇 I』清文堂出版、2005年。
- 8) 亀田修一「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、1995年。
- 9) なお、渡辺正気は「神籠石の築造年代」1988年(前掲注6)で、『日本書紀』斉明四年是歳条或本伝に記載される「国家以_兵士甲卒_陣_西北畔_。繕_修城柵_」などをめぐって、古代山城斉明朝築造説を主張した。これに対して八木充は「百濟滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』722号、吉川弘文館、2008年において、その文献読解の非を指摘し、古代山城の白村江敗戦後の築城説を説いた。いっぽう、近時、堀江潔は「百濟滅亡後における倭国の防衛体制」『日本歴史』818号、吉川弘文館、2016年で再検討を加え、渡辺正気説を是とする判断を示している。最新の堀江説に言及するならば、たとえば、「西北畔」の「西」を西日本の古代山城、「北」を北陸以北の日本海側の城柵に当てようとしているが、両者は存在意義を著しく異にした歴史事象であり、当時の朝鮮半島での軍事情勢や唐の対外戦略、そしてわが国の歴史的展開の段階を踏まえると、私(井上)は、八木充の論説が妥当と考えている。
- 10) 向井一雄「古代山城研究の最前線―近年の調査経過からみた新古代山城像」『季刊邪馬台国』105号、2010年など。
- 11) 前掲注4 稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」。
- 12) たとえば④の“門礎の加工”について、その加工痕跡の機能が明らかでないとしながらも、「実用上の意味が失われた」などと評価し、痕跡の有無を年代差と捉えること、⑤の各門にかかわる階段の有無を短絡的に年代差の表れとみること、⑦の門の内側付属柱の有無を年代差と捉えること、⑧の門内側の敷石帯について、扇型に開く平面型の違いを年代差と捉えること等々に関して、いずれにおいても状態の相異が年代差を反映することの機能上の論証が欠如

している。いずれも4つの門の重要性の違いによる格差や機能の差異に起因するとみるべきである。

- 13) 総社市教育委員会『古代山城 鬼ノ城2 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査』総社市埋蔵文化財調査報 19、2006年。
- 14) 前掲注7 赤司善彦「古代の山城とその背景」。
- 15) 五十嵐基善「西海道軍事環境からみた鞠智城の機能」『鞠智城と古代社会』第3号、平成 26 年度鞠智城跡「特別研究」論文集、熊本県教育委員会、2015 年／李進熙「朝鮮と日本の山城」『日本古代文化の探究・城』社会思想社、1977年。
- 16) 近藤浩一「古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城―築城背景と役割を探る―」『鞠智城と古代社会』第3号、平成 26 年度鞠智城跡「特別研究」論文集、熊本県教育委員会、2015 年。
- 17) 前掲注4 稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」。
- 18) 阿部義平「日本列島における都城形成―大宰府羅城の復元を中心に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』36、1991年／同 前掲注6「古代山城と対外関係」。
- 19) 杉原敏之「大宰府政府のⅠ期について」『九州歴史資料館研究論集』32、2007 年／同「大宰府政府 と府庁域の成立」『考古学ジャーナル』588、2009 年。
- 20) 亀田修一「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、1995 年。
- 21) 前掲注 15 李進熙「朝鮮と日本の山城」。
- 22) 2014 年、中国吉林省集安博物館での展示解説によれば、高句麗の領域のうち、現中国領内だけで 800 か所の山城が確認されている。
- 23) 前掲注 15 李進熙「朝鮮と日本の山城」。
- 24) ただし『旧唐書』では「二百余城」、『三国史記』では「二十余城」とある。
- 25) 小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003 年。
- 26) 井上和人『日本古代都城制の研究』吉川弘文館、2008 年／同『平城京ロマン 過去・現在・未来』京阪奈情報教育出版、2010 年／同「7世紀における都城・王宮の展開と日本古代国家の構築」『日本古代考古学論集』同成社、2016 年。
- 27) 吉川真司「難波長柄豊碓宮の歴史的位置」『日本古代国家の史的特質』思文閣出版、1997 年／同『飛鳥の都 シリーズ日本古代史3』岩波新書、2011 年。
- 28) 相原嘉之「倭京の守り―古代都市 飛鳥の防衛システム構想―」『明日香村文化財研究紀要』4、明日香村教育委員会、2004 年。
- 29) 亀田修一「古代山城は完成していたのか」『日本古代考古学論集』同成社、2016 年。
- 30) 前掲注 25 小澤毅『日本古代宮都構造の研究』。
- 31) 西本昌弘「藤原京と新益京の語義再考」『飛鳥・藤原と古代王権』同成社、2014 年。
- 32) なお、藤原京に後続する都城・平城京では、京域の四周に築地塀を本体とする羅城が巡っていたと推定され、また延喜式左京織式京程には平安京の京域南面に築地塀の羅城が設定されていたことが記載されている(井上『古代都城制条里制の実証的研究』学生社、2004 年／同 前掲注 26『日本古代都城制の研究』。)
- 33) 中村太一「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史』582号、1996 年／小澤毅「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究』44-3、1997 年。
- 34) 井上和人「唐長安城(隋大興城)形制規格復元試論」『条里制・古代都市研究』第 32 号、2017 年。
- 35) 関晃「大化改新」『岩波講座 日本歴史2(古代2)』岩波書店、1962 年。